
魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～

真理亞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～

【NZコード】

N2046X

【作者名】

真理亜

【あらすじ】

美響 光羽は大切な人を幸せにする事しかできず死んでしまつた…、

そんな光羽を見た神は次の最高神を決める代理戦争に誘われリリカルなのはの世界に転生した

彼は一体その世界で何を見るのか、また生き残る事が出来るのか。

プロローグ（前書き）

こんには 真理亞です

ここ最近なのはの2次創作にはまつたので作ってみました

馴文ではありますがそこら辺はまあ勘弁してください

では魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～始まります

プロローグ

青年には大切な友達がいて…、大切な親がいて…、大切な人がいた…、

青年はそんな大切な人たちを幸せにしようとした、

友達に好きな人がいれば何とかしてその恋を実らせ、
その人と友達になった。

また困ってる人がいたなら無償で助け
その人とも友達になった

そうして広がった青年の絆はある日突然一瞬にして砕けた

「さあ 今日も張り切っていきますか！！」

青年こと美響 光羽は朝から張り切っていた

「じゃ あ父さん・母さん行つてくるよ」

そう言つと彼は学校までの道のりを手指し走った

しばらく走つていると

プウ——————！

突然トラックが視界の端に現れたその瞬間視界が黒く染まった
最後に青年は思つてしまつた

俺の幸せはどうにあるんだろ？

「ふ やれやれえらい田にあった」

光羽は起きると自分のいた場所に驚いた

自分の死体が隣にあつたのだ

「くそつ何なんだよ俺って奴はこんな死に方じや死に切れねーよ！」

その顔には涙が流れていた

数日後 青年の葬式が始まった

そこで青年は驚いた

そこに居たのはかつての親友や小学校以来会つてない人それに一回しか助けた事のない人までも来ていたのだ

実際青年は街ではかなり有名で「無償の恩人」としていろんな人から親しまれていた

彼の葬式が終わるとそこにいた人たちは青年の話で盛り上がつていた、

来てくれた人達は美響 光羽と言う人間を通して他の人たちとの絆ができていた

「ああ俺は今この時のために生きてきたんだな」

その時の青年の顔は笑顔だつた

「さてそろそろ行くか・・・」

青年は名残惜しそうに成仏するとじろりと

「その魂ちょっとまつた！！」

突然空から女性の声がした

「その生きざまに感動した！、だから転生してもらいますー。」

突然変な事を言つていきた

「あのー話が見えないんですけど、とりあえず出でてくれませんか？」

そう言つと金髪の美しい女性が現れた

「ああ申し遅れてすみません私はディオーネーと言い天空の神をやつています」

突然の事に驚いたのか光羽は田を見開いていた

しばらく話すとどうやら次の最高神を決める戦(うらし)いのだが、

神同士が戦うと世界が壊れかけないので、

各々代理の死人の魂を見つけ他の世界へ転生させ代理として戦わせる事になつた

その代償に願いを一つと転生後の世界での一生と言つ物だつた。

「さて引き受けてくれますか？」

ディオーネーが聞いてきた

「なんで俺なんだ？」

光羽はいまだに自分が選ばれたのかが分からぬ

「そりゃあ君の人生に感動したからだよ」

「まあいいか俺やりますよ！」

光羽はやる気十分だ

「じゃあまず最高神の所に行きましょ」

ディオーネーはうれしそうな顔だつた

ディオーネーが指パツチンすると

いきなり神殿の前に着いた

中に入りしばらくすると

イスに座っている神様らしき人がいた

「ディオーネーただいま戻りましたゼウス様。」

光羽はゼウスを見てその威厳に飲み込まれそうだった

「ほう君がティオーネーが連れてきた代理人か」

しばらくティオーネーとゼウスが話し込んでしばらくすると

「美響 光羽君の人生見させてもらつた、なるほどティオーネーが選んだ理由がよく分かつた」

ゼウスが光羽に話しかけてきた

「転生する前にこの代理戦争のルールを教えてよ!」

そう言ってゼウスからこの戦争のルールを教えて貰つた

・転生者は全部で50人ほどいる

・全員を殺すか他の転生者の身に付けている何かを貰つ

・転生後の世界では何処で何時送られるのかは運次第

・転生後の世界では最高神が創つた物がいくつかある

・始まる時の開始年齢は全員6歳

・全員ゼウスから能力を一つ貰える

「とまあこんなもんだOK?」

ゼウスが気楽に聞いてくる

「分かつた後いくつか質問がある」

「どんどん聞いておくれ」

ゼウスは何気にドヤ顔

「まざ転生する世界はどうだ？」だ？ 後貰える能力は選べるのか？」

光羽は自分が気になつてゐる事を聞いた

「転生先はリリカルなのはじや、これはわしの趣味じや！」

またしてもゼウスはドヤ顔

「後能力については君の人生で決まる、君の人生だと心剣士じやな」

光羽は納得したような顔だった

「じゃあ最後に一つ願いを叶えてくれ」

「ふむいいだらう願いを言へ」

「じゃあ前世の世に「また会おう」と言つてくださー」

そういう光羽の耳には若干の涙があつた

「分かつたではそこの門をくぐるといこ

ゼウスは内心（ええ子じやの～）と思つた

そいつて光羽は新たな世界へ行くのであつた・・・

プロローグ（後書き）

はこと言つ事で今回はこれにて終わり

何か至らない点があれば言つてください

次回「拾い拾われ執事君（仮）」よろしく…！

拾い拾われ執事君（前書き）

ども～真理亞です^ ^

第一話「拾い拾われ執事君」ですどぞ～

拾い拾われ執事君

光羽 side

「転生する世界はリリカルなのはじゅ」

そつぜウス（神）に言われた俺は悩んでいた

何せ俺はリリカルなのはの世界を全く知らないのだから

（たつ確か管理局の白い悪魔が魔王で O - H A - N A - S H I だ
つけ？）

俺は生前の頃友達からそんな事を聞いていた

（まあ管理局の白い悪魔とやらに合わなければOKだな）

俺は自分で結論を決めるどゼウスは能力を教えてくれた

「君の場合は心剣士じゅな」

俺は自分の記憶で心剣士の能力を思い出した

（確かに他の人の心を剣にするんだつたつけ、でもその人の友好関係
がなければ発動しないんだつたかな）

俺は自分の能力を確認すると最後に願い事をかなえてもらつことに
した

「嘘」「また会おう」つて云えておこしてくれ」

俺は生前の大切な人たちに自分の気持ちをたつた一言伝えたつかつた

「ではそこの門から行くといい」

ゼウスは俺の隣にある門を指差した

何も言わず俺はそのまま門をくぐると俺の視界が白で埋め尽くされた
しまひへると視界が晴れ周りを見ると

「なぜだあああああああああああああああああああああああああああああ！」

おもあず呟んてしまつたなぜなら俺は今空を飛んでいるからだ

「助けて！！」

飛んでくる途中に女の子の助けを求める声がした

光羽 o ut

すずか side

私用村すずかは今どこか分からない場所に幽閉されています

さかのぼる事3時間前

私は今日で6歳の誕生日でこれから家に帰る所お

「月村 すずか、だな悪いが来てもらおつ」

行きなりサングラスを掛けた男の人腕を掴まれた、

私は逃げようとしてもがいたのだが男の力が強くあまり動けなかつた

その後車に乗せられ今に至る

(なんてこんな事になーたんたん)

私は最後の力を振り絶て叫んだ

「助けて！！」

しかし誰も来ない来るのはさつきの仲間だと思う人

「…子達だと誤って…」炎にならぬよ」

男は私の脳を二かみ殴りかかるこにとしたとき

突然窓が割れたのだ

そしてそこに現れたのは私と年齢があまり変わらない甘栗色の長め

の髪をした男の子がいた

「その子を離せ！！ その子は今嫌がつてたろーーー。」

突然の事に私はその子を見るしかできなかつた

すずか o ut

光羽 side

「その子は今嫌がつたろーーー。」

俺は声が聞こえた場所に落ちると殴りかかるつとする男がいたそれを見たら口が勝手に動いた

「ああなんだよがきのくせにーーー。」

男は俺に殴りかかるうとした

かわすつもりだつたが殴られた、俺は女の子がいる所まで吹き飛ばされた

「あのー大丈夫ですか？」

女の子が聞いてくる

「大丈夫だよそれより今はここから出よう」

「俺が立ち上がり逃げようとする

「誰が逃がすかこのがきが！！」

男がまた殴りかかつてきたその手にはスタンガンが握られていた

「ねえ君の名前は？」

俺はそんな男を無視して女の子に聞く

女の口には少し戸惑いながら

「私は月村 すずかです」

それを聞いた俺は

「言い名前だね、俺は美響 光羽だよ、よろしく

名前お言い終わった後

「うせえんだよ！！」

男の拳が目の前まで迫ってきていた

それを俺はしゃがんでかわし落ちていたガラスの破片で男の手に刺した

「つまおおおおお」

男が痛がっていたその隙に

「すずか逃げよひーー！」

とつむにすずかの手を引いて外に逃げた

しばりくの間俺たちは走つていた

「いじまでくればまあ問題ないだろ」

俺たちは道が狭い路地裏に逃げ込んだ

「それにしてもこれは何処だ？」

光羽 o u t

すずか s u d e

「すずか逃げよひーー！」

突然私の名前を呼ばれ手を引いた事に私は今までになくからドキしていた

「それにしてもこれは何処だ？」

その言葉を聞いた私は途端びっくりした

「ええじゃあ美響君は何処からきたの？」

「まあ空からかな、あと光羽でいいよ俺もさっさかつて飛行場や
たから」「

その言葉に私は驚く事しかできなかつた

私はとりあえずケータイで姉に連絡をいれ事情を説明すると

しばらくして姉が車で迎えに来てくれた

「あらあら仲が良いのね~」

姉の田線はなぜか私の手を見ていた

気になつて見てみると私と光羽君の手が繋がっていた

私は思わず手を離していくけど

このときの私の顔はきっと真っ赤になつていただろう

すずか o ut

しばらく俺は月村（姉 忍さんと言ひひじい）の車に乗つけられたまま月村家に向かつ事になつた

月村家について俺は一通りはなした

もちろん神の代理戦争の事は言わず

名前以外の記憶をなくしなぜがいきなりスカイダイビングした事

しばらく黙りこんだ忍さんは

「ねえあなた執事にならない？」

とんでもない事を言つてきた

続く？

拾い拾われ執事君（後書き）

はい今回ここまで読んでくれてありがとうございます
すずかのキャラがあまり分からぬ。rzn
まあそこら辺は原作見ながら何とかしていきます
感想よろしく！！

次回「吸血鬼って要は人間」

吸血鬼＝人間（前書き）

はい、どうも真理亜です

この前感想をいただいたところ

自分もまだまだ　だと思いました

まあそんな事より心剣士の説明です

・パートナーと心が通じあつた時に心剣が出てきます

・心剣には様々な効果があります

・心剣をパートナーに刺すことでパートナーの深層心理に入りこめる

まあこんなもんですかね

近い内に紹介文を書きたいと思います

ではどうぞ

吸血鬼＝人間

光羽 side

「執事にならない？」

彼女はいつたい何を言つているんだろつかおもあず

「なぜだあああ！」

叫んでしまった

「だつて俺どう考えつたつて不審者ですよ」

しまつた！―自分で自分の事を不審者と言つてしまつた！―

「だから記憶が戻るまで家でいつたん預かる間執事として働いてくれないかしら」

「少し考え方させてください」

近くの公園に行きました。公園に座っていると

「やあ、何をな時間に夜遊びですか？」

俺と同じ年ぐらいの黒の長髪の少年が話しかけてきた

「まあ多分ですナビ君も転生者ですよね」

「…………」

「まあ待つてください君とはまだ戦いたくないので」

田の前に立てる少年は一瞬ながら言つてこの

まつ毛を立てて俺はコイツの事が分からぬこのだ

なぜかと云つと何も見えないのだ、表情では笑つていても感情・
考えていても・全くもつて見えないのだ

「何も喋らないのもいいですナビ、とりあえず後ろの人たちまでつ
にかなりませんかね？」

後ろ? 後ろを振り返るとわざわざさすかを襲つた連中が公園に入ってきた

「じゃあ僕はこれで、ちなみに僕の名前は風香です、また生きて会いましょう!」

やつらと彼の姿が吹いた風に溶け消えてしまった

それで問題はこの連中だ

しばらく考えこんでいると

「光羽君外は寒いから中に入ろう。」

「待てますか? けに来るな!」

最悪の場面ですすかが来てしまった

「お前ら何故すずか襲ひ田的はなんだ!...!」

俺は何故すずかを狙うのか目的を聞くと連中のボスらしき男が出て

きた

「目的？ そんなの決まつてるじゃあねえか掃除だよ」

「てめえは知らないだろ？ その嬢ちゃんは吸血鬼なんだよ」

「だからおとなしく『この嬢ちゃんを』渡しな

すずかの方を見ると震えている

「……お前達はそいつで何人殺してきた」

「ああまず手始めに『この嬢ちゃんの両親を殺した、あの時は最高だつたぜ、両親は強かつたがまあボスが倒してくれた』

（「いつがボスじゃないのか）

「だから死にたくなかつたら おとなしく『この化け物をよこしな、その嬢ちゃんはこの世にひとつないだ！ 人間じゃない』

その時の俺はキレた

「違うだろ！！ 何が吸血鬼だ！ 生きてるんだ！ それだけでもう人間だろ」

「吸血鬼と言う鎮にすずか今まで必死に耐えたはずだ！それをゴミ扱い何かすんじゃねえ！」

「光羽君・・・・・」

すずかは光羽の方を見ている

「だから・・・・」

「そんな人間として生きてるすずかを「化け物」など「ゴミ」などと言つお前達を俺は許さない！！」

「たとえすずかは吸血鬼だとしても・・・・・」

「世界が敵に回つても・・・」

「俺はすずかと言つ一人の女の子を守つて見せる・・・」

「・・・・・ありがとう光羽君」

すずかが答えた瞬間すずかの腹のあたりが光輝き剣の柄が出てきてそれを持つた瞬間彼女の背をつて居るものを見つた

「優しく皆の心を救うそんな思いの中に隠された真実それは重い鎖で縛られている」

剣を引き抜く後景を見ている連中は全員啞然としている

「吸血の剣、ブラット・リュウーゲ」

手に持つた銀色の短剣の真中に赤い宝石埋め込まれが柄に鎖が繋がれていて鎖の最後は銀でできた十字架になっている

すずかもこれにはびっくり仰天だつたらしく驚いている

「そんな見せかけの剣出されたつて怖かねえ！！」

男がスタンガンを手に持ち突っ込んで来た

「ああ体が軽い」

突っ込んできたボスの肩を掴みきれいな放物線を描きながらジャンプした

俺がジャンプした後男の腕には鎖が巻かれていた

その鎖を引くとともに簡単に男が宙を舞つた

鎖で繫がれた男を残つた連中の方に投げる

男が投げられた瞬間連中に隙ができる

「そこだつ！」

俺は瞬間男達の方に走る

解いた鎖で男達を威張り上げ

「ああもう終わりださつとこなくなれ」

連中を公園から追い出す

「見てたぜやるじやねえかガキいや転生者と呼んだ方がいいか？」

金の短髪（見た目ギルガメシコ）背中に長剣を背負っている18歳
ぐらいの青年が入ってくる

「お前は誰だ？ 転生者なのか？」

「俺はそこに居る奴らからボスと言われた男で転生者の竜崎 蓮、
能力は『剣術の才能』と言つものや」

おいおいそんなことまで教えていいのかよ

「ちなみに貴様はガキか転生者どっちで呼ばれたい?」

「いや…呼ぶ必要はない!」

俺は蓮に短剣を投げた

「全く最近のがガキは危ないな」

蓮は短剣をよけ鎖を素手で掴むと

「返すぞ」

蓮は俺よりも速いスピードで短剣を投げてきた

俺は慌ててよけるしかし短剣の先端が俺の頬をかすめる

「なぜだ何故すずかの両親を殺した答える……」

「なにこの世界に来て退屈だった只それだけの事だ」

「たったそれだけで殺してきたのか……」

「ああそつだそれ以外の理由など……ない……」

次の瞬間俺の持っている短剣と蓮の持てる長剣がぶつかりあった

吸血鬼〃人間（後書き）

はい第二話でした

光羽君6歳に見えないどうしよ

まあ前世の年齢が18歳ぐらいだからいいよね

書く事がないので次回のネタを皆さんで大切に大会したいと思います

突然俺の目の前に現れた謎の人物

？？？「大丈夫かい？」

光羽「○○○○○○」

この○○○○○○に当てはまる言葉を入れてください

おもしろかった人を採用します

ではまた

風の主は結構強い（前書き）

どうも真理亞です

今PCが修理中だから携帯からの投稿です

なので更に誤字脱字があると思いますのでよろしく

風の主は結構強い

ガキイイン！

幾度となく剣が重なる

暫くすると光羽が徐々に不利になる

(「のままじやまざい」)

そう思った時

「つまんね～なお前弱すぎだからお互に次の一撃で決めよつや…本
氣で來い！」

「分かつた…すずか君の心を貸してくれ」

「光羽君頑張つて」

すずかに応援して貰つた光羽はいきなり自分の手に血がつく程度の
傷をつける

自分の血を短剣に垂らすと短剣の刃はルビーよりも紅い色になつた

「はっ！それがてめえの力か…良いね！」

葉っぱが一人の中央に落ちる次の瞬間

「レクイエム！」

「秘剣！燕返し！」

今まで斬撃の中で一番でかい光が出た

剣が重なり有つた場所には傷だらけの光羽と膝を地面に着いた蓮が
いた

「今のは良い一撃だつたぜ小僧」

「ハアハア」

「今の一撃を讀えお前の知らないこの世界のルールを教えてやる」

「何だと」

「この世界には元の世界のアニメキャラがいるしかもほとんど戦闘力が高いキャラばかりだ そいつと戦つて勝つとそいつの武器か戦闘モーションを手に入れる事が出来る」

「なんだと」

「さて今日は辞めだ疲れた」

蓮が帰りつつとする

ヒュン

風が吹く

その瞬間

ブチャ

蓮の腕が切れる

「見ちや駄目だすぞか！」

光羽がすずかの皿を擱べ

「全くこんな所で戦つのを辞めないで下れー」

「てめー…」

「蓮さんあなたにはがつかりしましたもーと戦つて下れーよ」

風香が突然現れるだがその顔はさつ もぐつた風香の顔ではなく残酷な顔だった

「君達が街中でドンパチやるから僕が結界を張つていたんですよ」

「やつらに派手にやつしてゐに誰も来ないな」

「なのに戦いを辞める何て…蓮さんは失望しました死んで下れー」

「まへー殺すなー」

光羽は風香に「風香の動きが止まる

「あすかちよと田を開じて耳をふれこどり」

「ねえ居なくならないでね」

「ああ もうひと

それだけ言つとすずかが田とみみを塞いだ

「どうしてぐだれこやーに呪たら君が死にます」

「駄田だ殺すのはよくない

「仕方ないですねじやあ君に死んで貰いましょう本當は君との戦い
はもつと後が良かつたんですけど…仕方ないです」

風香が挙げた手を振り下ろす
その瞬間一筋の風が光羽を襲う

光羽は先の戦いで疲れてその一瞬行動が出来なかつた

「小僧お前はまだ死ぬな」

突然光羽の前に蓮が立ち持つている長刀で風を受け止める

「お前傷は良いのか？」

「こゝなもん睡を付けとけば治る」

そう言つてゐる蓮は言葉とは違つて何とか意識が保ててる状態だつた

「まさかまだ動けたなんて思つても見ませんだしたよ

再び風香は手を上に掲げる

その瞬間

「そこまでだ！ 双方武器を納めろー。」

突然空から声が聞こえる上を見ると何やら防護服を着た40ぐらいの男がいた

「管理局ですか…」

「面倒臭そうだなー」

そう言って風香と蓮はどこかに行ってしまった

「大丈夫だったかい？」

「貴方は？」

「俺は時空管理局局員のフレイル・バートン 転生者だようじく

月日は流れもう2年後（前書き）

お久しぶりです魔理亜です！

久しぶりの投稿ですではござ

月日は流れもう2年後

s.i.d.e 光羽

長かった……

俺がこの世界に来ていきなりほかの転生者と戦い何とか生き残れた

あの日

「俺は時空管理局局長のフレイル・バートン 転生者だよ！」

「さて提案だがこれから俺たちと手を組まないか？」

「えつ…」

話のぶつ飛び具合に驚いてしまった

「どうあるか？」

「どうあえず詳しい話を聞かせてもらひませんか

おはなし中・・・・・・

「つまり何人かでチームを作り他の転生者達を倒した後残った人達で戦い勝つたその人をこのゲームの勝者と言つことですか・・・」

「まあ大体そんなもんだ、でどうする?」

「分かりました、これからよろしくお願ひします」

「よしきたじやあこれから!! リチャルダに!!」

無駄にはしゃぎあだら」のお父さん

「すみませんが行く前に少しあ世話になつた人たちに説明したいので少しの間待つてつてください

「おひいこや

その後すずかや忍さんたち親族が見つかった事を説明し

すずか家の家を出て行つたその時のすずかの顔は少し寂しそうな目
だった

時間の流れは速くあれから2年の時がたち
俺はフレイルのおっさんと修行に明け暮れていた

ちなみに今いる部隊はフレイルが作った転生者だけの部隊である隊
員の年齢はさまざまであり
俺は最年少

なぜか転生者は魔力値が高い平均でS+
ちなみに俺はSSだ

なんでも転生する際に神の力が加わついてその影響らしい

仕事と言つてもロストロギアの封印だつたりする
ちなみに神が作った物もロストロギア扱いになつてゐる

そつ言えば俺のデバイスつてまだできてないんだよなー

そう部隊の中でデバイス無は俺だけである

じやあどう戦うかつて部隊の人から心剣を抜かせてもらいそれで戦

「うのがやつと

そんなんある口

「おーい光羽ー」

「なんですかジユンさん」

同じ部隊の人が話しかけてきた

「お前とすずかは同じ年なんだよな

「はあそりですかねじも」

「じゃあもひ原作が始まると

「マジツですかー..?」

「まじまじ大マジ」

「でもそつなるときつと「俺が転生オーリ主だー」って奴が出てくる
だろうな」

「あのよべー！次創作で出でてくる奴ですよね」

「ああ無駄にハーレムを作つてやるひ言つてゐる輩がでてくるな」

その事をフレイルのおせさんにていつ

「よし分かったではみんなで地球に行いつでないか

「「「「はあーー？」」「」」

思わず部隊のみんなではもつてしまつた

「異論は認めん！！」

相変わらずおっさんは元氣だな

「しかしもつそんな時期か・・・」

「では出発は3日後まあ長期休暇だと思つてくれ

「後光羽は残つておいてくれ

「では解散……」

みんなが帰る中俺はおととこに連れられたところ残った

「で用事はなんですか」

「まあそんなこと無いなよ」

やつにながらフレイルは歩き始めた

「一体どこへ行くんですか?」

「お前にバイクが必要だと思つてなあつて」

ついた先は無限書庫だった

「フレイルさんなんだとおもひたの……」

「まあつて」

フレイルが本棚を漁つていると

「おっこれだこれ」

1冊の本を取り出した

「なんですかそれは」

「これは光天の書と言つて古代ベルカで作られた夜天の書の対になる物だよ」

「だけどこれには欠点があつてね」

「開かないんだ」

「なんでそれを俺に?」

「それには俺の考えがあつてだな」

「文献によるところこの書は意志がありそれが分かるとしたらお前の心剣士としての能力だけなんだ」

「まあ物は試しだやつてみる」

若干嫌だがまあ物は試しと書いて事で光天の書に触れてみた

するとなぜか頭の中に映像が流れ込んできた

とてもとても悲しい映像

1人目の王はただ死んでゆく兵士達を見ることしかできなかつた本
人はそれがとても辛かつた

2人目の騎士は戦いのさなか愛しい人を失い悔やんだ

3人目はただの人間だつただが村を滅ぼされそれが悔しく力を手に入れたがその力が他の人が悲しませたことに悲しんだ

4人目は世界が敵に回つても一人の少女との願いを叶えようとした
が駄目だつたそれが悔しかつた

5人目は燃え行く城の中自分の不甲斐無さを悔やみ悔しがり悲しみ
辛かつた

そんな映像

「おこお前泣いてるのか」

フレイルが聞いてくる

あれ俺泣いていたのか・・・

涙の滴が本に落ちたその瞬間

『マスターの認証終了しました』

いきな本が喋り出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046x/>

魔法少女リリカルなのは～絆の転生者～

2011年11月23日17時54分発行